スウィフトの生涯（X）

『ガリバー旅行記』(1726)

三　浦　　謙

ウッド事件介入のためスウィフトがやむなく中断していた大きな仕事があった。『ガリバー旅行記』の執筆である。

『ガリバー旅行記』は1724年4月にはほぼ先が見えていた。同年4月2日のチャールズ・フォード宛の手紙の末尾で，スウィフトは「健康で余暇があり気分がよければ近々旅行記を仕上げます[1]」といっている。ところがドレイピア書簡執筆のため『ガリバー旅行記』の完成は翌年8月迄伸び伸びになった。1725年8月14日付の同じくフォード宛の書信では「『ガリバー旅行記』を完成しました。今転写しているところです。まずまずの出来なので大いに世の中の改善に役立つと思います[2]」とスウィフトは得意気に語っている。2日後，スウィフトは三たびフォードに手紙を書いて「新しい本がないため手持ちの本を繰り返し読んでいます。私の旅行記のほうは出版のため，かなり訂正しながら転写しています」[3]といっている。

フォードの外にもスウィフトの親しい2，3の友人が『ガリバー旅行記』執筆の事情を心得ていた。ボーリンブルックは1724年9月12日のスウィフトへの手紙で「あなたは私に帰国するように，帰国すれば旅行記を携えてロンドンにやってくるとあなたは約束してくれますが」[4]といい，1725年7月24日の帰国後のロンドンからのボーリンブルックの書信では「小人国や大人国への旅行記を執筆中の旧友に一身上のことを話題にしてよいものかどうか大いに考えました」[5]といっている。シェリダンには1725年9月11日の手紙で，『ガリバー旅行記』の第四篇に言及し「ヤフーの説明を読んでいただければ，ますます人間に似ていることがわかっていただけるでしょう[6]」と述べている。

その3日後，スウィフトへの書信でポープが「あなたの旅行記のことは

いろいろと聞いておりますが」[7] というと，スウィフトは同年9月29日のポープへの書簡で次のように回答している。

私は（一部を破棄するほか）誤字を訂正したり，不適切な個所を修正したり，転写したりして，旅行記の仕上げに時間を費しています。これは新たに書き加えた分をも含めて全体が4部から成り立っています。この旅行記は世間が出版に値する時，いや，むしろ，出版業者がこれを出版するだけの勇気があるとみられる時に，活字に付されることでしょう[8]。

同じ書簡の中で，スウィフトは『ガリバー旅行記』執筆の意図に言及している。

全力を傾けて私がここで言わんとする一番の狙いは世間を娯しませるよりは，世間を苛立たせることにあります…私はこれまですべての国家，すべての職業すべての集団を嫌悪してきました。私の好意はすべて個人にそそがれます。例えば，法律家という種属を私は嫌悪しますが，某判事には好意をもちます。医者，軍人の場合も同じです…私はもっぱら人間という動物を蛇蝎視するのであって，ジョン，ピーター，トーマスといった個々の人間には心からなる好意を寄せています。これがこれまで長年私を支配してきた考え方で，この考え方はこれからも続くことでしょう…この人間嫌い（もっともタイモン[9]流ではありませんが）という大きな基盤の上に私の旅行記の全容が築かれています。ですから，誠実な人間がすべて私と意見を同じくするまで，私は決して心安まることはないでしょう。[10]

タイモンとは莫大な財産を蕩尽してから友人知己の背信に出遭うと極端な人間嫌いになり，森の中の洞窟に隠れ住んで訪れる者は残らず追い返し，最後は海辺に自らの墓を築いて命を絶ったアテネの富豪タイモンである。スウィフトはタイモンとは異り，僧衣を纏いながら俗界の塵にまみれ，人間一般を嫌悪しながら，個々の誠実な人間には好意を惜まなかった。誠実な人間とは例えばアーバスノットが挙げられる。引き続き同じ書簡の中で，スウィフトは「あゝ，この世の中にアーバスノットが12人いたら私はこの旅行記を燃やしてしまうのですが」[11] といっている。それだけにアー

バスノットが1735年2月他界した時には，スウィフトはアーバスノットを銀行預金の利子のように見たことは一度もなかった[12]といって嘆いている。

ところで，『ガリバー旅行記』制作への最初の言及は1721年4月15日付のフォードへの書簡に遡る。ここで，スウィフトは「今，旅行記を書いています。大冊になりそうです。これまで知られていない変った国々を巡る話です。健康がすぐれず気分がよくないため遅々として進みません」[13]といっている。

翌年の1月1日のスウィフトへの手紙でボーリンブルックは「あなたの旅行記が見たい」[14]といい，「今日の深遠な神学者や哲学者20人の中の19人の著作を引合いに，あなたは良識や信仰のあり方を説かれるが，それを上廻るものをあなたが書く2ページの戯詩の中に見つけることができる。私はその点，請け合っていい」[15]といっている。ボーリンブルックはスウィフトの旅行譚を単なる諧謔として受け取ってはいなかった。

1722年6月のスウィフトへのヴァネッサの手紙ではヴァネッサが，ある女官の家を訪ねたさい，猿に手にしていた扇を掠めとられたので，周章狼狽の余り，彼女自身，猿の奇難に遭うのではないかと，はなはだ憂慮したという個所がある。これは『ガリバー旅行記』第2篇「ブロブディンナグ渡航記」第5章で，猿にいためつけられるガリバーの醜態を想い描いての記述に違いないとH. ウィリアムズはいっている。

この後，1723年のクリスマス迄『ガリバー旅行記』への言及はない。同年の12月25日，ボーリンブルックはフォードに手紙を書いて，スウィフトが現(うつつ)をぬかし，馬が理性的な生き物で人間が野獣である国に納まり馬なみに振舞うのをステラが止めさせている[16]といっている。この手紙を読んだスウィフトは1724年1月19日付の書信で，次のようにフォードを非難している。

あなたは謀叛人です…あなたが漏らさなければ，どうしてボーリンブルックがステラと馬のことを知っているのですか…，私はヤフーの雄も雌も嫌悪します。ステラとマダム・ド・ヴィレット[17]が我慢できる限界です…私は馬の国を去り，今，飛び島におります。ここには長逗留いた

しません。私の最後の2つの旅も間もなく終ります[18]。

こうして，本章冒頭の1724年4月の記述に戻る。

結局,『ガリバー旅行記』の制作過程はまとめると次のようになる。1721年の初めに執筆を開始した『ガリバー旅行記』は1725年8月には実質的に完成していた。その間，1722年6月と1723年末にはそれぞれ第2篇第5章と第4篇が仕上がり，1724年4月には第3篇が完成間近だった。ところがウッド事件介入のため『ガリバー旅行記』の執筆が一時頓挫し，ウッドの特許が撤回された1725年9月以降は出版まで推敲を重ねていたということになる。

1713年のスクリブラーラス・クラブの活動に『ガリバー旅行記』の起源があるとみる説は，第7章で触れた通り，回顧録「マルチナス・スクリブラーラスの想い出」が1741年ポープ全集の第2巻に収められて初めて公刊されるさい，ポープによって大幅に手を加えられた可能性があるので確な証拠にはならない。

1726年3月上旬，スウィフトはアイルランドを立ちオックスフォード経由で，月の半ば頃ロンドンに到着，ベリー・ストリート[19]に宿舎をとった。以後，アーバスノットの案内でチェスターフィールド卿[20]とロンドン市内を見物したり，アックスブリッジ[21]近傍のドーリー[22]に新宅をもうけたボーリンブルックを訪ねたり，トウィカナム[23]のポープ宅に滞在したりして11年ぶりの旧交を温めた。

今回のロンドン訪問の目的は久方ぶりに友人に会うことで，とくにトウィカナムのポープ宅には5月から7月末迄，長期間滞在している。

『ガリバー旅行記』出版の交渉は約5ケ月に及んだこのたびのイングランド滞在が終るまぎわの1726年8月8日，リチャード・シムプソン[24]なる架空の人物を仕立てて出版業者ベンジャミン・モット[25]宛にスウィフトが出した書状で始まる。『ガリバー旅行記』の原稿は同年3月スウィフトがイングランドに渡るさい携行していた。出版向けの原稿は，筆者の素性を隠すため，トウィカナムのポープ宅をも含めてロンドン滞在中も，しばしばスウィフトと同宿していたゲイが清書したらしい[26]。1726年7月26日には，ボーリンブルックが「トウィカナムの3人のヤフーに」[27]という宛

名で，ロンドン西郊のこの閑静な土地で打ち興じているポープ，スウィフト，ゲイの３人に「私も近々仲間に入りたい」旨の短信を送っている。この頃には原稿の清書は仕上がるか，もしくは相当進捗していたのだろう。

リチャード・シムプソンの書信[28]は次のような文面である。

私は従兄のレシュエル・ガリバー氏から数年前に彼が書いた旅行記を託されました。私がこうしてあなたの許にお送りするのはその約４分の１の原稿です。私が書いた「読者へのはしがき」[29]でおわかりの通り原稿は私がかなり短縮しました。私はこれを数名の優れた判断力を具えた高名な人に見せました。彼らは間違いなくよく売れるというのです。そして，この原稿およびこれに続く原稿は１，２個所多少諷刺が利いていると思われるけれど，それは罪にはなるまいというのが一致した見解です。しかし，その点につきましては，あなたはご自分で判断されるなり，お友だちの助言を受け入れるなりなさってください。そして，あなたのお友だちもしくはあなたが私とは別のご意見でしたら，あなたがこの原稿をお返しくださる時その旨おっしゃってください。原稿は３日以内にお返しください。私が聞いているあなたの評判はとてもよろしいので，私はあなたを大いに信頼しますから，将来その点を私が悔むことがないようにお願いします。このようなあなたへの信頼を裏切って，原稿をあなたの目が触れないところに放置しないようにしてください。

出版物としてこの旅行記はあなたにとってたいへん価値あるものとなりましょう。私は友人でもある従兄の代理人として，あなたが十分考慮されるよう期待します。著者は貧しい船乗りのために本の売り上げを使うつもりでおりますので。それに，２百ポンドは代理人として受け取れるギリギリの額であるようにいわれています。ですが，売上げがたまたま私の予想のように思わしくない場合には，多過ぎるのではないかと思えても，あなたのいわれる通りの額をお返しします。

おそらく，これは商売人からみると奇妙な商売のやり方と思われるかもしれませんが，私は初めから一度もお会いしたことのないあなたを大いに信頼しておりますので，あなたが私を同じように信頼するのは難しいことではないと思います。ですから，３日間お読みくださって，お考

えいただいた後で，私との契約に応ずるのが妥当と思われたならば印刷にかかってください。そうしましたら，あとの続きの分は次々と1週間以内にお送りします。ただし，そのさい，あなたがこの原稿を印刷に付すという決定をされたら，すぐに3日以内に印刷に付し，あなたのところに原稿をお届けした者に，小包並に包装した2百ポンドの小切手を手渡してくださることが条件です。あなたのところに原稿をお届けする者は同じように今月の11日木曜日夜9時きっかりに，あなたのところに伺うでしょう[30]。もしあなたがこの提案をお認めになれないようでしたら，原稿を木曜日に伺う者にお渡しください。お返しいただくご意向でしたら，あなたの方からのご提案はご無用で，ただ私の申し出が受けられないという点だけを一筆お書き添えください。

この書信の冒頭で触れているシムプソンの書いた「読者へのはしがき」というのは次のような内容である。

この旅行記の著者レミュエル・ガリバー氏は私の昔からの親友でありますが，また母方の親戚でもあります。3年ほど前ガリバー氏はレドリッフ[31]の彼の家に物好きな人が集まるのが嫌になり，郷里ノッティンガム州ニューアーク[32]の近くに手頃な家と狭い土地を購入，以来その地に引きこもって今日近隣の人たちの尊敬をうけながら暮しています…

氏はレドリッフを引き払う前に，私に原稿を渡し，お任せするから適当に処理してほしいといわれました。私は3回丹念に読みました。文体はたいへん率直で飾り気がない。私が気づいた欠点は著者が旅行家の流儀にならって少々微細にわたり過ぎる点があることぐらいです…

何回かの航海での風向きや潮流，偏差（真北と磁北との差角）や方角に関する夥しい記述，暴風に遭ったさいの船の操作上の船乗りらしい詳細な説明，緯度や経度にかんする記事とかを本書から私が思い切って削らなかったら，少くとも今の2倍の長さになっていたでしょう。こうしたやり方をガリバー氏は多少不満に思われるかもしれませんが，私はこの作品をできるだけ一般の読者の能力に合わせるようにしました…

前述の8月8日付のシムプソンの書状にたいするベンジャミン・モット

の返書の草稿が残っている。ここで，モットは「1年の中で最も仕事がないこの休暇の時期に，しかも短時日で，200ポンドの手付金は出しかねる。だが，原稿を受け取って1ケ月以内に本を出し，売行がよければ6ケ月以内にお需めの額を間違いなくお支払いする」といっている。8月11日付と覚しきこのモットの応答は原稿が気に入ったせいか甚だ好意的である。後年のことになるが，約6年後の1732年8月チャールズ・ウォーガン[33]宛の手紙で当時のダブリンおよびロンドンでの出版事情をスウィフト自身次のように語っているからである。

ダブリンでは著者に金を払おうなどという気は全くありません。時折，予約注文で引き受けますが，儲かるとは思っていません。

ロンドンでは著者が人気があって，作品が一般受けするものでなければ駄目です[34]。

シムプソンはモットの条件を受け入れたのであろう。8月13日モットに，

上下2巻を遅くともクリスマスまでに出してほしい[35]。

という短信を送っている。

そして，スウィフトは2日後の8月15日ロンドンを立ってアイルランドに向った。

こうして『ガリバー旅行記』が出版されたのが約2ケ月後の1726年10月28日である。スウィフトは結局初版の原稿の校正はやらずじまいであった。

『ガリバー旅行記』出版後1ケ月を経過しない1726年11月5日，アーバスノットはスウィフトへの手紙で，

『ガリバー旅行記』はジョン・バニアンと同じくらい売れるでしょう。ガリバーはあの年齢（とし）でこんな楽しい本（メリー・ブック）が書けるとは幸せな男です[36]。

といっている。ジョン・バニアンの『天路歴程』は初版が1678年，同じ年に第2版，翌年の1679年には第3版，1685年には第10版というふうに，当時のベスト・セラーだった。

「あの年齢で」というのは，『ガリバー旅行記』を書き始めた年齢である。『ガリバー旅行記』は船医だったガリバーの一人称の体験記で，ガリバーがこの旅行記を書きだした時は50代半ばに達していた。

では，50代半ばの元船医の航海記はアーバスノットのいう通り，はたしてメリー・ブックなのであろうか。

『ガリバー旅行記』の第1篇「リリパット国渡航記」と第2篇「ブロブディンナグ渡航記」が17世紀フランスの大鼻の無双の剣客シラノ・ド・ベルジュラック(37)の主著『月と太陽諸国の滑稽譚』に類似していることは，ハロルド・ウィリアムズの指摘(38)するところである。だが，ウィリアムズは類似していることの指摘に止まって，この点にかんする突込んだ叙述は怠っている。

両者の類似といえば次のような個所が挙げられる。たとえば，シラノの滑稽譚の「月の巻」で主人公の「私」は身の丈6メートルの4つ肢で歩く月人王国の巨人に出くわす。彼らは「私」を女王が飼っている珍獣の雌に違いないと思い，女王に引き取られるまで，「私」を香具師（やし）の家に連れて行く。香具師はトンボ返りその他道化の真似事を教えこみ入場料をとって「私」を見世物にする。珍獣というのは王城の地に連れて行かれてわかったことだが猿なみに扱われているスペイン人である。「私」とスペイン人は朝の6時から夕方まで王宮へ引きも切らずに見物にくる月人間の見世物になる。その後，「私」は頭を直立させて2本肢で歩く姿は駝鳥にそっくりだというところから鳥籠に入れられて王女に愛玩されるようになる。

『ガリバー旅行記』第2篇「ブロブディンナグ国渡航記」第2章ではガリバーは錐穴が2，3あるだけの木箱に入れられて市日に同じように見世物にされる。ガリバーを捕えた巨人国の農夫は行きつけの宿屋に着くと，東西屋を触れ廻らせて客を集める。ガリバーは広間のテーブルの上で，剣を振り廻しての活劇を8時間ぶっ続けでやらされヘトヘトになる。第3章では巨人国の国王への贈り物にされ，王妃に愛玩される。その上，いつも晴れた日には乳母のグラムダルクリッチがガリバーを外気に当てるため鳥籠のような箱にガリバーを入れて窓辺に置く。

また，他にこんな類似点も挙げられる。シラノの滑稽譚で月の国を訪れた太陽人で地球で暮したことのある男が「なにしろ，地球の人間共の愚か

さ野卑さときたら恐るべきもので，私も私の仲間も昔のように喜んで学問を教えてやる気持ちなどすっかりなくしてしまったよ[39]」と零すところがあるが，これは，『ガリバー旅行記』第2篇第6章の末尾でブロブディンナグ国王がガリバーの話をきいて口にする人間蔑視のことば「おまえの同胞の大半は自然の摂理でこの地球上を這いまわっている最も忌わしい害虫の一種だ」[40] とよく似通った発想である。

こういったいくつかの類似点が見うけられるが，次の例になると『ガリバー旅行記』のほうが遥かに生彩があって読者をひきつける。シラノの滑稽譚では「私」が訪れる太陽諸国には小人国と鳥の国がある。身の丈小指ほどの小人の王国で，国王は軀相応に肺も小さいのですぐ息切れするといいながら，「私」の肩から身も軽々と飛び降りると小人の臣下を従えて踊り始める。この小人の国の国王は妖精で存分に踊り舞った末，鶯に変化して「私」を鳥の国に案内する。

同じ客人をもてなすにしても，『ガリバー旅行記』のリリパット国宮廷でガリバーを皇帝が娯しませる珍無類のもてなしぶりとガリバーがお返しにする余興とを較べると，上の話は物の数に入らない。

「リリパット国渡航記」第3章で，語学も相当上達した上に，髪の毛の中にもぐり込んだ小人たちに隠れん坊まで黙ってやらせるほどリリパットの庶民に親しまれるようになったガリバーを皇帝が宮廷に呼んで歓待する。リリパット皇帝がガリバーを立たせて両肢を一杯にひらかせると，その胯間をリリパットの精鋭4千が密集隊形で行進する。指揮官を先頭に小人の部隊が太鼓を鳴らし旗をひるがえして股の間をくぐり抜けるのを見て，ガリバーは笑いを抑えるのに苦労する。ガリバーはお返しに余興を披露して皇帝を娯しませるが，その余興もなかなかふるっている。

ガリバーは長さが2フィートで太さが杖ぐらいある棒をまず9本とりあげ，2フィート半四方の正方形が出来るように地面に打ち込む。次に同じ棒を4本，地面から2フィートの高さに水平に縛りつけると，ハンケチを，打ち込んだ9本の棒に結びつけて太鼓の皮のようにピンと張る。4本の横棒はハンケチよりは約5インチ高くなって欄干代りになった。準備が出来ると，ガリバーはリリパットの騎兵の精鋭24騎を平原にしつらえたハンケチの上に乗せ，敵味方に分けて模擬戦を戦わせる。矢を射るやら剣を抜

くやら秘術を尽しての攻防に皇帝はご満悦の様子だった。

『ガリバー旅行記』の「リリパット国渡航記」にはシラノの小人国では及びもつかないこうした愉しいエピソードが随所にある。しばしば指摘される1720年から25年にかけての歴史事象は踏まえなくてもエピソードそのものをわれわれは十二分に娯しむことができる。アーバスノットのいうメリー・ブックは「リリパット国渡航記」に最も相応しい呼称であろう。

『ガリバー旅行記』の第3篇「ラピュータ，バルニバービ，ラグナグ，グラブダドリッブおよび日本への渡航記」はバラバラで物語としての一貫性を欠くので，ベドラムの精神病棟を端から端まで通り抜ける感じだという評言[41]もある。

ラピュータの首都ラガード学士院での実験は英国学士院[42]での実験研究を戯画化している。ここでは研究員が氷を火薬にしたり，キューリから日光を抽出したりする研究などに没頭している。だが，ここで戯画化されている研究の多くは子供染みた他愛のない幻覚に終始している感がある。パロディ化するさいには，まず対象を全面的に受容することが先決だが，英国学士院の自然科学にかんする記録は科学的な思考に慣れていないスウィフトには手強過ぎたのだろう。アーバスノットもラガード学士院の個所が最も生彩がないといっている[43]。

第3篇で異様なのはラグナグ王国に生息する不死人間ストラルドブラグである。ストラルドブラグは永生を願う凡俗の夢を微塵に砕くグロテスクな生き物である。80を過ぎる頃からストラルドブラグは老残の醜さをさらけ出し，頑固，貪慾，饒舌，嫉妬が強まり，自然の情愛も消え失せる。その醜悪さは女のほうがはげしい。丹羽文雄が短篇『厭がらせの年齢』で80半ばを越えた老女の生きざまを描いている。88で死んださる老婆は「2年間糞尿の中で生きていた。目は見えないが食慾は旺んなので，おまるを腰に結びつけていたが這い廻るのでおまるをひっくり返し顔や手が糞尿まみれになる…老母が起居していた部屋の2畳の畳は死後裏返すこともできず田圃の畦で焼いたが，死臭に似た匂いが終日山村に漂った」[44] と書いている。作者はここで宗教の観念が人間を捉えるにはある程度年齢に限度があるようだといっている。80も半ばを越えた衰残の人間は宗教でも捕捉できなくなってくる。

ストラルドブラグは，この年齢の枠を軽く越えて永劫に生き抜き老醜をさらけ出すことを止めない。ガリバーはストラルドブラグを実見して永生の夢をかなぐり捨てる。

シモンヌ・ド・ボーボワールもスウィフトのように不死人間を描いている。『人はすべて死ぬ』の主人公レイモン・フォスカは記憶喪失症の不死人間である。ゆきずりの女レジーヌとの瞬時の情交を通じて，フォスカは正常な死すべき人間への回帰を願うが，フォスカの願望は果されることなく，2人が結ばれることは決してない。

エピローグで，フォスカはハツカネズミとフォスカ自身が生き残り，ハツカネズミが未来永劫，白い地球を回り続ける夢を見る。夢見の話を終えるとフォスカはレジーヌの許を去ってゆく。「あなたにはいずれ終末がくる」といって遠去かってゆくフォスカの後姿を見守りながらレジーヌは一種の羽虫にでもされたような挫折感を味わう。別れて間もなくレジーヌは鐘楼から身を投げて死ぬ。

ボーボワールの『人はすべて死ぬ』では生身の正常な人間が不死人間によって敗北感を味わわされる。不死を呪咀するのは不死人間であるフォスカのみである。

ボーボワールはフォスカを自動人形のように描いて，そこに高齢に伴なう老醜をいささかも書き加えることはなかった。もし書き加えていたら，レジーヌは不死人間によって敗北感を味わわされることなくストラルドブラグに幻滅したガリバーのようにフォスカの許を去ったことだろう。

ボーボワールは老若美醜を超えて人生の無意味という不条理の意義を徹底させるために不死人間を描いた。したがって，ストラルドブラグの場合のように永生に伴う老醜を描く必要はなかったのである。

いささか横道に外れたが，『ガリバー旅行記』の第4篇に話を進めよう。

『ガリバー旅行記』の中で最も長い最後の一篇「フウイヌム国渡航記」はこれまで多くの論議を喚び起してきた。

先天的に徹底した道義的性向を具えたフウイヌム[45]が果して人間の理想なのか。

「自然の完成物」といわれて一切の悪徳とは無縁のフウイヌムと貪欲で野卑で不潔な下等動物ヤフー[46]に2分された異様な国で，フウイヌムを讃

美しヤフーを蛇蝎視するガリバーはベドラムの狂人となり果てたのか。

ガリバーはスウィフトなのか。

フウイヌム国を宰領するフウイヌムは馬である。フウイヌムは友情と仁慈を最高の美徳とし，物欲，猜疑，嫉妬，野心とは全く関りがない。姦通も喧嘩もなく，おのれの子女を溺愛することもなく他国と戦争することもない。

逆に，顔は平たくて鼻は落ち込み唇は厚くて大口の，野蛮人さながらのヤフーは手当りしだいにモノを食らい，満腹するときまって泥の中でも構わず寝てしまう。仲間同志のいがみ合いが激しく依怙地で強情で復讐心が強い。能力といえば，精々フウイヌムの荷物を牽いたり担いだりするくらいである。ガリバーはこのようなヤフーを全く教育の見込がないと見限ってしまう。だが，毛深さと皮膚の色と爪の長さを除けば，不快極まりないヤフーが人間と変らないことに気づいてガリバーは愕然とする。

ところが，フウイヌムとヤフーという2分法の異様な世界に住みついて1年足らずで，フウイヌムを敬愛するようになったがガリバーは人間世界に2度と帰ることなく余生をこの国で過ごし善行を積んで一生を終えようと決意する。

ガリバーにはフウイヌムは理想の国なのである。だが，文字がなく知識はすべて伝承で，語彙が貧弱なのは感情語が豊かでないためだろうとガリバー自身判断したフウイヌム国が語学好きのガリバーにとって，真実，理想の国なのか。

ガリバーの祖国愛に燃えての話を聞き終えたフウイヌムから，人間の理性は猟犬の知能にも劣ると憫笑され，ヤフーと同一視されたガリバーが，なぜフウイヌム国に余生を託するのか。

フウイヌム国は完璧な道徳的性向を具えた馬族と不快この上ない畜類ヤフーという両極端の住まう世界である。中間の生物は一切生息しない。ガリバーはヤフーなのだ。この異風の国で余生をかけて徳を磨くというキャプテン・ガリバーの決意は狂気の沙汰という外はない。

結局3年フウイヌム国に住んだ挙句，ガリバーは居残るのならヤフー並の労役に服するか，さもなくば国外に退去せよという通達をフウイヌムから受ける。悲嘆のあまり主人であるフウイヌムの足下に悶絶するガリバー

はやむなく国外退去を選ぶが，このような憂目に遭ってもガリバーのフウイヌム憧憬の念は一向に止むことがない。逆に，ヤフー嫌悪の念は募ってゆく。

帰途，ニュー・ホランドで土人に襲撃されるところを救ってくれた命の恩人であるポルトガルの船長ドン・ペドロにもガリバーは，つむじ曲りの態度で終止して胸襟を開くことがない。当てがわれた船室からは出ようとはしないし，新調してくれた服も24時間空気消毒した上でないと着ようとはしない。リスボンに上陸して船長と一緒に町を散策する時にはガリバーはヤフーの臭い除けに，鼻に芸香（ルー）や煙草を塡めたりする。

ドン・ペドロの計らいで故国の土を踏むことができて妻子と会うことができた時には，妻に抱かれて接吻されると，雌のヤフーという意識が消えず忌わしい動物に触れた嫌悪感が募って気絶してしまう。出航時，妊娠していた妻への慰労の言葉などは全くなく，帰国後5年経っても臭いを嫌って妻子を避け，既に飼っている2頭の馬と毎日少くとも4時間話をするのがなによりの楽しみである。

帰国途上のポルトガルの船長ドン・ペドロとの邂逅や帰国後の妻子への対応ぶりはガリバーの狂気を裏付けるが，ガリバーは文字通りの狂人ではない。ガリバーの症状はフウイヌムへの異常なまでの思慕と執着からくるパラノイアであって，パラノイアは程度の差こそあれ正常な人間にしばしばみられる。

ならば，ガリバーはスウィフトにとって何なのか。もちろんスウィフトその人ではない。

数々の異国遍歴とりわけブロブディンナグ国とフウイヌム国での生活体験で激しい人間嫌悪に陥いるガリバーは，先に挙げた1725年9月29日のポープへの手紙でスウィフトが明らかにしている『ガリバー旅行記』の制作意図に沿った人物である。だが，スウィフトはガリバーにヤフー（＝人間）は全く教育不可能だと一方でいわせながら，第4篇の最後の章では最高の美徳の体現者である馬の国フウイヌム国での生活体験を通じて，もっぱら人類を教化し啓発するという高邁な目的からガリバーに筆を執らせたのだといっている。

すると，人間は教育可能なのか不可能なのか，教化し啓発する望みがあ

るのかないのか。

教育不可能とみたのはキャプテン・ガリバーの偽らざる感慨であろう。教化し啓発する望みがあるとしたのは宗教家としてのスウィフトの願望であろう。

高度な清潔，理性，慈善，品位はスウィフトの求める理想であった。だが，すでに堕罪して後定論[47]の世界に住まう人間には所詮かなわぬ理想である。しかし，宗教家としてスウィフトは人間の今一歩の教化を願わざるをえなかったのである。

『ガリバー旅行記』という人間嫌悪の書が身分の上下を問わず，老若男女の別なく，発刊当初から広く読まれたのは，このような人間救済への願いが底辺に流れていたために違いない。

『ガリバー旅行記』発刊後間もない1726年11月17日スウィフトへの手紙でゲイは次のようにいっている。

> 10日ぐらい前『ガリバー旅行記』が当地で出版されました。この本はそれ以来町中の話題をさらっています。初版は全部1週間で売りつくしました。『ガリバー旅行記』は皆大好きだといっておりますが，違った人の意見を聞くのがなによりの楽しみです[48]

デフォンテーヌ[49]は『ガリバー旅行記』のフランス語訳の序文で，イングランドの内外で『ガリバー旅行記』のオリジナルは3週間で1万部売れたといっている。出版業者のモットは読者の需めに応じ切れない有様だった。モットは1726年には8つ折判を3度，1727年には四六判と8つ折判を一度ずつ出した。1726年11月28日にはパーカーズ・ペニー・ポスト紙[50]にリプリントの連載が始まり，ほぼ1ケ年後の1727年11月3日連載は完結した。1726年の末にはダブリンで2種類の『ガリバー旅行記』が発刊され，1727年にはロンドンで縮刷版の刊行もみた。デフォンテーヌのフランス語訳は1727年4月にパリーで上梓され，オランダ語訳とドイツ語訳も相次いで日の目をみた。

こうした当時の普及ぶりと発刊後260年以上経た今日でも尚，世界文学史上揺ぎない位置を占めている点を考えると，「『ガリバー旅行記』は将来万人の賞讃の的になるでしょう」[51] といったアレキサンダー・ポープの予

言は決して過度の讃辞であったとはいえないだろう。

注

(1) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, p. 11.
(2) Ibid., p. 87.
(3) Ibid., p. 89.
(4) Ibid., p. 29.
(5) Ibid., p. 82.
(6) Ibid., p. 92.
(7) Ibid., p. 96.
(8) Ibid., p. 102.
(9) Timon (320?–230? B. C.).
シェイクスピアの作品に悲劇 *Timon of Athens* (1607) がある。
(10) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, pp. 102–103.
(11) Ibid., p. 104.
(12) Ibid., Vol. IV, p. 334.
(13) Ibid., Vol. II, p. 381.
(14) Ibid., p. 415.
(15) Ibid., p. 416.
(16) Irvin Ehrenpreis, *Swift* Vol. III, pp. 442–443.
(17) Madame de Villette.
ボーリンブルックの2番目の夫人。
(18) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, pp. 4–5.
(19) Bury Street.
1710年および1726年にスウィフトはここに宿舎をとり，1707年から1711年にかけてリチャード・スティールもここに居住した。当時，'a handsome open street' といわれた。ロンドンのSW 1区にある。
(20) Chesterfild, 4th Earl of, Philip Dormer Stanhope (1694–1773).
(21) Uxbridge. ロンドン西部の都市。
(22) Dawley.
(23) Twickenham. ロンドンの西約10マイルの Middlesex にある村落。テムズ川の川辺はこの近辺が最も美しいといわれている。
(24) Richard Sympson.
(25) Benjamin Motte (d. 1738).
(26) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, p. 152, n. 2.
(27) Ibid., pp. 146–147.
(28) Ibid., pp. 152–154.

(29) *My Preface to the Reader.* Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift* の Vol. XI, *Gulliver's Trarels* では *The Publisher to the Reader* となっている。署名は同じく Richard Sympson.

(30) 1726年11月16日のスウィフトへの手紙で，ポープはベンジャミン・モットから聞いた話として「モットはどこからきたのか分らないし，だれからきたのかも分らないが，夜，玄関先にハックニー・コーチから落された『ガリバー旅行記』の原稿を受けとった」といっている。

この謎の1件はスウィフトが8月15日イングランドを出立した後のことのようだが，使いはだれがしたのか。ハロルド・ウイリアムズはエラスマス・ルイスかゲイでなかったかと推測している。

The Correspondence of Jonathan Swift Vol. III, p. 181, p. 181 n2.

(31) Redriff. 今日の Rotherhithe.

(32) Newark.

(33) Charles Wogan (c. 1698–1752).

アイルランドの旧家の出。スペイン軍に身を投じ，Brigadier-General に昇進。後，La Mancha の知事になった。

(34) *The Correspondence of Janathan Swift* Vol. IV, p. 52.

(35) Ibid., Vol. III, p. 155.

(36) Ibid., p. 179.

(37) Cyrano de Bergerac (1619–55).

フランスの武人・著述家。

(38) *The Prose Writings of Jonathan Swift* Vol. XI, p. XV.

(39) シラノ・ド・ベルジュラック（伊東守男訳）『月と太陽諸国の滑稽譚』p. 46。

(40) *The Prose Writings of Jonathan Swift* XI p. 132.

(41) David Nokes, *Jonathan Swift,* p. 323.

(42) the Royal Society. Charles II 世によって 1662 年設立された科学技術振興のための学会。

(43) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, p. 179.

(44) 『日本の短篇』下　pp. 335–336.

(45) Houyhnhnm. 馬の嘶 whinny からの造語といわれている。

(46) Yahoo. yah と ugh という2つの嫌悪感をあらわす間投詞の合成語といわれている。

(47) postlapsarianism. 神はアダム堕罪後の人間を対象とするというカルビン派などの予定説。

(48) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, p. 182.

(49) Pierre-François Guyot Desfontaines (1685–1745).

(50) The Parker's Penny Post.

(51) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. III, p. 181.

主要参考文献

Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford, 1969).
Temple Scott, ed., *The Prose Works of Jonathan Swift, D. D.* (London, 1908).
Sir Walter Scott, ed., *The Works of Jonathan Swift, D. D.* (Edinburgh, 1824).
Henry Craik, *The Life of Jonathan Swift* (Burt Franklin, 1969).
Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift* (Oxford, 1972).
David Nokes, *Jonathan Swift* (Oxford, 1987).
『日本の短篇』下（井上靖編，文芸春秋社，1989）。
シラノ・ド・ベルジュラック『月と太陽諸国の滑稽譚』（伊藤守男訳，講談社，1976）。
シモーヌ・ド・ヴォワール『人はすべて死ぬ』（川口篤他訳，人文書院，1976）。